

機関番号：20105
 研究種目：若手研究（B）
 研究期間：2008～2010
 課題番号：20791774
 研究課題名（和文） 動物との交流をめぐる認知症高齢者のコミュニケーションの発展性：縦断的観察から
 研究課題名（英文） Improving the communication of institutionalized elderly people through an animal mediated intervention
 研究代表者
 河村 奈美子 (Kawamura Namiko)
 札幌市立大学・看護学部・助教
 研究者番号：50344560

研究成果の概要（和文）：本研究では、対人交流やコミュニケーションに支障を持ち、認知症治療病棟に入院している高齢者に、動物を活用したレクリエーション(Animal Assisted Activity：AAA)を実施し、継続的かつ詳細な観察や評価を通して患者－動物間、動物が存在する環境での患者間における、コミュニケーションについて詳細に記述し分析を試みた。対象病棟のケア職員に対しては質問紙調査を用いて、AAAの捉え方について調査した。参加高齢者に対してはコミュニケーションの様子について継続的にビデオを用いて観察した。参加高齢者の動物の行動や状態に関する発話は初めから比較的多く見られ、犬の心的状態に関する発話は少ないが徐々にみられる様子が観察された。

研究成果の概要（英文）：The purpose of this study was to examine the communication between elderly dementia people and animal, and dementia people each other through an animal mediated intervention. The care staff who had helped elderly-animal communication were asked a questionnaire. The reactions of elderly dementia people were videotaped and analyzed. Elderly dementia people talked about behaviors of animals. They did not talk about the mental states, which they can guess, about animals, first.

交付決定額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2008年度	1,100,000	330,000	1,430,000
2009年度	800,000	240,000	1,040,000
2010年度	800,000	240,000	1,040,000
総計	2,700,000	810,000	3,510,000

研究分野：精神看護

科研費の分科・細目：地域・老年看護学

キーワード：看護、認知症、高齢者、精神看護、アニマル・セラピー

1. 研究開始当初の背景

急速な高齢化の波は全世界の問題となり、老年看護の必要性が社会的要請の緊急課題となると同時に、高齢者の個々の生活歴や生活スタイルを重視するケアが求められている。認知機能・精神機能に障害を持ち、施設の中で生活する高齢者にとって、精神行動上の問題は、生活の楽しみや、生活そのものの維持を妨げる要因ともなっている。周辺症状とされる高齢者の精神行動上の問題は、ケアにより改善されることが言われており、専門的なケアや精神的側面からの看護が重要と

されている。その一つのアクティビティ・ケアとしてアニマル・セラピー (Animal Assisted Therapy 以下 AAT とする) やアニマル・アクティビティ (Animal Assisted Activity 以下とする) は近年広く実施されるようになってきた。なかでも高齢者へのリラックス効果や自発性・意欲の向上に関する効果などのポジティブ効果は世界的に注目され、主観的・客観的な評価が試みられてきた (Stolley, 1989; Motomura, 2004; 新山ら, 2004)。特に心理的な側面における動物活用の効果は 1960 年代より認められている

(Levinson, 1968)。動物との関係における精神的なポジティブ効果に関する研究は増えているが、実際のセッションの中で人と動物が交流する場におけるコミュニケーションのありようを、詳細に分析した研究は海外においても極めて少ない。

我が国では一部の施設で AAT が実施され、その効果は情緒的・経験的に認められているものの、実際のセラピー活動を継続する中での具体的事例や効果に関して質的に実証している研究報告はわずかであり、科学的根拠を添えるなど、心理的・精神的視点から詳細に対象者の「心の動き」に焦点を当て分析した研究はないに等しい。その理由には、AAT 活動への医療スタッフの関心や参加が少なく生理機能検査等が実施されていないことや、コミュニケーションに疾患や障害を持った対象者の評価には影響する因子が多く難しいこと、AAT 活動の継続の難しさが考えられる。

研究者は、これまで認知症高齢者に対して、精神行動上の問題に取り組むための、一つのあり方として、犬を利用した Animal Assisted Therapy (AAT) を実施し、問題行動とみなされている認知症高齢者の精神行動上の問題の軽減にむけた動物の活用に取り組んできた (Kawamura, 2007)。また、看護・介護スタッフが AAT 実施をどのように捉えているのかについて研究してきた。その中で、認知症高齢者が「動物と向きあった時に起こる動物との直接的な交流」だけではなく「動物の存在する場で生み出される他者との交流」も同様に重要であることが判明してきた。つまり、対動物と、對他者との二つの関係の中で、参加高齢者が「自分」を表現し、その場を共有することによって他者とつながっていく過程が見受けられたのである。その詳細を明らかにすることが課題として残されていた。

2. 研究の目的

本研究の目的は、対人交流やコミュニケーションに支障を持ち、認知症治療病棟に入院している高齢者に、AAT や動物を活用したレクリエーションを実施し、継続的かつ詳細な観察や評価を通して患者-動物間、動物が存在する環境での患者間、患者-スタッフ間における、コミュニケーションのありようを詳細に記述し分析し、その発展性を検討することによって、精神看護領域における AAT 活動の構築を目指す基礎的研究として資料を作成することにある。

3. 研究の方法

(1) 研究デザイン

縦断的な観察による質的分析と、精神機能尺度の量的分析を平行して実施した。質的分析の視点は患者-動物、患者間、スタッフ-

動物の視点で各セッションをすべて記述した。

さらに、対象者をはじめとする認知症高齢者をケアする職員には、動物を活用した場に関する質問紙調査を実施した。

(2) 対象者

①対象者をはじめとする認知症高齢者をケアする職員

②認知症の診断を受けており認知症病棟に入院している高齢者

(3) AAA の場の設定

本研究における AAA の一部は、北海道の NPO 法人であるボランティアドックの会の協力を得て実施した。1 回/月を目安に A 施設での訪問をしており、研究への協力を依頼した。

さらに B 施設においては、個人的に犬の訪問活動に経験のあるボランティア個人の協力を得て、実施した。

具体的な場の設定としては、研究の対象となる認知症高齢者をふくみ、AAA 参加を希望する高齢者 10-18 名程が輪になり、犬 1-5 頭 (犬の体調等により頭数は変動する) の訪問をうける。高齢者は犬に触れ、撫でることを通して、ボランティアや職員、他的高齢者同士の会話を楽しむ場となった。

(4) 方法

① ケアスタッフに対する質問紙調査

認知症高齢者と動物 (犬) との交流会で AAA を企画し実際にその交流を促進する立場にあるケア職員 (看護・介護職員) を対象に、認知症高齢者と犬との交流をどのようにとらえているのかを因るために、質問紙調査を実施した。本調査は、2 か所の精神科病院内にある認知症病棟で実施、その病棟に所属する看護・介護職員を対象に質問紙を配布した。

本研究に対して協力の得られた 2 か所の施設では、これまで犬による AAA が月に 1-2 回/1-2 か月の頻度で実施されていた (AAA の頻度は、院内での感染症蔓延の時期やボランティアドックの頭数の調整などもあり変動するが、1-2 回/月を目安としている)。今回は、本研究の開始前、6 回の AAA 後、12 回の AAA 後の 3 回にわたり、認知症高齢者と犬との交流に対するとらえ方に関して、ケア職員から質問紙に対する回答を得た。

質問紙は、AAA への参加経験、参加高齢者と犬、参加高齢者と他参加者、参加高齢者とボランティアのコミュニケーションについての内容から構成した。

② 認知症高齢者の変化

企画した AAA に参加する認知症高齢者のうち同意の得られた方について、AAA 開始前後のバイタル測定を実施し、変化をみるとともに、6 回の AAA 参加の様子をビデオに記録しコミュニケーションについて検討した。

4. 研究成果および考察

(1) 認知症病棟ケアスタッフへの質問紙調査
研究の協力を得た2施設2病棟における質問紙配布と回収率について表1. に示す。

協力の得られたA病棟・B病棟ではこれまで犬の訪問活動を受け1回/1~2か月の頻度で実施してきた経歴があった。しかし、スタッフのシフトの関係等でAAAを担当したことがないケア職員や見学経験のない職員もいた。

表1. 質問紙配布数と回収率

A病棟・B病棟	AAT前	6回後	12回後
合計配布数	56	54	43
回収	55	48	36
回収率 (%)	98.2	88.9	83.7

※12回後質問紙実施までに19名が対象病棟からの移動等のため配布できなかった。

2つの病棟におけるAAAの担当経験について、割合を図1. に示す。

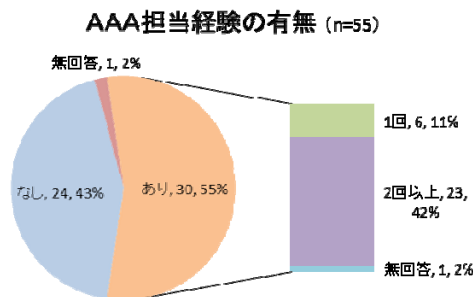


図1. A施設・B施設のケア職員のAAAの担当経験とその内訳

AAAの担当経験のない24名のケア職員の中では、14名(55%)の職員はAAAの活動を見かけたことがあるということだった。

ケア職員に対する質問紙は、高齢者と犬との触れあい、高齢者と他高齢者とのふれあい、高齢者とボランティア及び職員とのふれあいの視点から、さらに意欲・コミュニケーション・関心・気持ちが通じ合うという項目について「とてもそう思う」を6点、「まったくそう思わない」を0点として、ケア職員の捉え方を測定した。

ケア職員のAAA担当経験の有無とAAA参加高齢者に対する印象の相違について表2. に示す。

AAAを実際に担当した経験のある職員の方が、AAAという場において高齢者が他者に関心を抱いていると思うことを回答している。また、高齢者が、犬や他者、ボランティアおよび職員と気持ちが通じあうと思う項目においてより肯定的に捉えていることがわかった。

表2. ケア職員のこれまでのAAA担当経験の有無と参加認知症高齢者に対する印象

「AAAにおける」 犬とのふれあいについて	AAA担当経験の有無による平均値		p値	Z値
	あり	なし		
1 意欲的だと思う	3.87	3.70	0.550	-0.597
2 コミュニケーションを楽しむと思う	4.26	3.97	0.150	-1.438
3 好きだと思う	3.74	3.55	0.529	-0.629
4 気持ちが通じ合うと思う	3.91	2.80	0.002	-3.032
他者とのふれあいについて				
5 意欲的だと思う	3.13	2.80	0.340	-0.955
6 コミュニケーションを楽しむと思う	3.22	2.83	0.194	-1.299
7 関心を抱くと思う	3.13	2.40	0.008	-2.647
8 気持ちが通じ合うと思う	3.22	2.40	0.026	-2.221
ボランティアや職員とのふれあいについて				
9 意欲的だと思う	3.22	2.77	0.138	-1.484
10 コミュニケーションを楽しむと思う	3.26	3.10	0.771	-0.291
11 関心を抱くと思う	3.17	2.90	0.451	-0.754
12 気持ちが通じ合うと思う	3.52	2.87	0.034	-2.125

Mann-Whitney検定 p<0.05, n=54

AAA実施により、ケア職員が認知症高齢者の捉え方に変化が生じているかについては、その経過を表3. に示す。

表3では、AAA開始前、6回終了後、12回終了後の得点を示している。すべての項目において6回後(約3か月後)において、平均得点が低下した。また、12回後においては、得点が高くなっているものもあった。特に他者とのふれあいについて、「コミュニケーションを楽しむと思う」においては、AAA開始前とAAA6回後、12回後において、その平均得点は有意に低下した。

表3. ケア職員のAAA開始前、開始6回後、12回後における参加認知症高齢者に対する印象の変化

「AAAにおける」 犬とのふれあいについて	平均得点			p値
	前	6回後	12回後	
1 意欲的だと思う	3.92	3.35	3.73	0.137
2 コミュニケーションを楽しむと思う	4.23	3.77	3.96	0.023
3 好きだと思う	3.65	3.62	4.08	0.252
4 気持ちが通じ合うと思う	3.23	2.65	3.04	0.158
他者とのふれあいについて				
5 意欲的だと思う	3.23	2.69	3.12	0.113
6 コミュニケーションを楽しむと思う	3.32	2.56	2.96	0.023
7 関心を抱くと思う	2.85	2.65	2.73	0.532
8 気持ちが通じ合うと思う	2.92	2.85	2.88	0.816
ボランティアや職員とのふれあいについて				
9 意欲的だと思う	3.08	3.00	3.23	0.325
10 コミュニケーションを楽しむと思う	3.19	3.19	3.31	0.892
11 関心を抱くと思う	3.04	2.88	3.04	0.708
12 気持ちが通じ合うと思う	3.15	2.88	3.00	0.472

Friedman検定 p<0.05, n=26

これらの結果から、認知症高齢者に動物との交流の場を設定した場合、動物を中心にして交流がおのずと広がるものではないと職員がとらえていることがわかる。むしろ、職員の期待よりは、AAAがおのずとコミュニケーションを誘導する場になるものではないことについて示唆されたといえる。結果とし

て場が盛り上がり、動物とのコミュニケーションが社会的コミュニケーションに有効であることについては、既に先行研究からも示されている。しかし、今回の結果からは、ケア職員には高齢者がより犬や他者とのコミュニケーションの意欲を感じられてはいなかった。つまり、参加する認知症高齢者から関心をどのように導き出すのかという効果を導く要素について検討が必要である。

(2) 認知症高齢者の変化

本人及び家族から了承の得られた認知症高齢者のAAA参加の様子についてビデオカメラに記録し、コミュニケーションの特徴を分析した。研究に協力の得られた認知症高齢者のなかでも、言語的コミュニケーションが成立し、思考が読み取れる方を、分析の対象とした。

認知症高齢者が動物と対峙し見られる毎回のコミュニケーションには、4つの内容が認められた。

① 動物と対峙することによって現れるコミュニケーションの導入

認知症高齢者である対象者が、犬のAAAに参加する中で会話の特徴として見られたことに、AAAの時間内において前半はディスクリプティブな発話が多く見られた。発話の量は個人差がある、発話の内容については、犬の行動や、大きい等の形態や、賢い・かわいい・大人しいなどの表面的な描写による発話が多かった。交流が進むにつれ、雰囲気にも慣れるのか、途中から、犬の気持ちを推測する発言や、自分の知覚を犬にも重ね合わせ、犬の気持ちを推測する発言が見られた。

② 動物とのかかわりによって発展するコミュニケーション

後半の時間帯では、犬との交流も進む。犬の気持ちを推測したり、直接的な話しかけが多くなる傾向が見られた。

コミュニケーションの導入と発展での発話の違いについてA氏の例をあげる。

<例：A氏の発話から>

前半

「(犬を見て) あんまり大きいのね。」

「大人しいねー。」

後半

「(犬に向かって) おばあちゃん、大好きなの、犬。ねー、こっち向かないの？こっち向きなさい。(犬が抵抗する) 嫌だって言うんだよ。ねー、んー、かわいいね。」

この例にあるように、それぞれの交流時間の前半には、動物の描写的な発言が多く聞かれるが、犬を撫でたり、抱いたり、また犬についてボランティアと会話

が進むにつれて、犬の心理を読み取るような代理的代弁が聞かれた。代弁の裏には、動物の心を推測し動物に成り代わるという成り込みの姿勢(鯨岡, 2006)があらわれているといえるだろう。

このコミュニケーションについて、回を重ねるにつれ、導入部分から発展的・感情的なコミュニケーションへの移行は早くなる傾向が読み取れた。しかしながら、AAAは動物との単なる物理的な対峙ではなく、コミュニケーションの場である。この会話の推移は勝手に起こるものではなく、ボランティアとの会話が進む中で起こるものであった。

③ 動物と高齢者の心的距離を近づけるボランティアや職員の介入

認知症をもつ対象者と動物との会話の橋渡し役として、ボランティアやスタッフの果たす役割は大きいことが明らかになった。発話の少ない対象者から発話を促すような楽しく・明るい動物にまつわる会話は、ボランティアから提供されることが多かった。職員は、対象者の情報と動物の情報の共通点を見出しながら、会話を進め、より対象者が動物との距離を近づけられるように導いていた。

ボランティアや職員がB氏に伝えることによって、うなづくなどの反応が殆どであったB氏から、犬に対して質問をするという発話を導くB氏との会話の例を示す。

<例・B氏の発話から>

ボランティア：○○(犬の名前)ね、のどが細くなってるんで、おっきいの(ごはん)

食べれないんですよ。詰まっちゃって…。

職員1：Bさんみたくお食事柔らかくして。

ボランティア：そうなんですよ。

職員1：噛み噛みしやすくして頂いてるんだって。

ボランティア：ふやかして。

B氏：(数回うなづく) うちもそうだよ。

職員2：うちもそうかい。

B氏：(うなづく)

職員1：うちもそう。私もそうって。

B氏：やわやわ。人間と同じ。

…(この犬は) なんでも食べるの？…

この、「なんでも食べるの？」という発言はB氏が自ら犬に関して問いかけるという関心が現れた初めての能動的発話であった。

さらに、ボランティアや職員は、言葉数の少ない認知症の対象者に発話を引き出そうとするのではなく、その場を楽しむという姿勢で介入した。それは、対象者の心をほぐし、発話が強いられなくとも場に参加している雰囲気を作り上

げており、対象者が居心地良いと感じることのできる場を構成し、その中で次第に対象者から感情の表出が導かれていたともいえる。

5. 総合考察

認知症高齢者にとって、動物の交流とはどのようなものであるか。関わる人の役割とは何かを見出す目的で、視点を変えて研究を実施した。これまで、さらに高齢者に対しては、動物が存在することによって社会相互作用が促進されるという結論が導かれていた(Srolley, 1989)。

この社会相互作用に影響する過程について、本研究で調査をすると、ケア職員は動物の存在が短期間に対象者のコミュニケーションや関心を期待するほどには促進しないと認識していることが明らかになった。それと同時に12回後にあるような継続的介入が、対象者の関心を抱かせ、コミュニケーションを楽しむことにつながると認識していることがわかった。

会話を質的に読み解くと、AAAという場が動物と高齢者が一対一で対峙する場ではなく、それゆえに発展的な会話が出現していることがわかる。他の参加者やボランティア、ケア職員がそれぞれの役割や立場から参加することにより会話や関係性がより発展したことについても明らかである。

すなわち、動物を活用したアクティビティやセラピーは、その場を構成する人の力にも効果が大きく委ねられているともいえるだろう。動物そのものが持つ幼形成熟の特徴を備えた個体のかわいらしさにより、その場にいる参加者の心が和むことは推察できる。しかしそればかりではなく、ボランティアや職員の場を盛り上げようという会話、また認知症高齢者の反応を細やかな視点で読み取り、わずかな関心をも誘発させ、会話を発展していく人の力があってこそ、認知症高齢者の関心やコミュニケーションが発展していくことが明らかになった。

会話の分析は今後、詳細に行われる必要がある。また本研究の結果については、携わるボランティアやケア職員に提示していくことにより、動物を活用したケアの可能性を考えより場が活性化するよう検討を重ねることが課題である。

【参考文献】

- ・阿保順子. (2004). 痴呆老人が創造する世界. 東京：岩波書店
- ・Kawamura, N., Niiyama, M., & Niiyama, H. (2007). Long-term evaluation of animal-assisted therapy for institutionalized elderly people: a preliminary result, *Psychogeriatrics*, 7,

(1), p8-13.

- ・河村奈美子 (2007. 9). 認知症高齢者へのアニマル・セラピー：犬と控えめに交流をする参加者の言葉から見る心の動き. 第4回日本質的心理学会(於奈良)：ポスター発表
- ・鯨岡峻. (2006). ひとがひとをわかるといふこと：間主観性と相互主観性. 京都：ミネルヴァ書房
- ・Levinson, B. M. (1962). The dog as co-therapist. *Mental Hygiene*, 46, p59-65.
- ・Motomura, N., Yagi, T. & Ohyama, H. (2004). Animal assisted therapy for people with dementia, *Psychogeriatrics*, 4, p40-42.
- ・新山雅美, 新山春江, 金子正恵, 河村奈美子, 森田茂, 杉山善朗 (2004). 子犬とのふれあいを通じた高齢者のケア, 老人ケア研究, 21. p63-71.
- ・Stolley, J. M. (1989). The Effects of pet therapy on the social behavior of institutionalized Alzheimer's clients. *Archives of Psychiatric Nursing*, 3, (4), p191-198.

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計2件)

- ① 河村 奈美子、新山雅美、新山春江 (2009)、認知症高齢者へのアニマル・セラピー：暴力的な行動の消失に向けて、ヒトと動物の関係学会誌 21 巻, 査読有, p. 54-61
- ② Kawamura, N., Niiyama, M., Niiyama, H., (2009) Animal-Assisted Activity: Experiences of Institutionalized Japanese Older Adults, *Journal of Psychosocial Nursing and Mental Health Services*, 査読有, 47(1), p. 41-47

[学会発表] (計3件)

- ① 河村 奈美子 (2008)、動物との交流にみられる認知症高齢者の心の動き、日本精神保健看護学会第18回学術集会、6月21-22 (東京女子医科大学)
- ② 河村 奈美子 (2008)、動物との交流の場における認知症高齢者 A さんの他者との関係のなかに体験される世界、日本質的心理学会第5回大会、11月29-30 (筑波大学)
- ③ Kawamura, N. & Niiyama, M. (2008) Animal assisted therapy for elderly Japanese dementia patients : A longitudinal study, 14th World Congress of Psychiatry, 20-25 September, Prague (Czech Republic)

[図書] (計0件)
[産業財産権]
○出願状況 (計0件)
○取得状況 (計0件)
[その他]
ホームページ等

6. 研究組織

(1) 研究代表者

河村 奈美子 (KAWAMURA NAMIKO)
札幌市立大学・看護学部・助教
研究者番号：50344560

(2) 研究分担者

なし

(3) 連携研究者

なし